掲載日:2013年08月27日,面名:LB0XX0,記事ID:K201308270A0LB0XX00001 (C)河北新報社

"森里海"に学ぶ

大正大と三陸の連帯

－2－

「手入れ」で森に調和を

京大名誉教授 竹内 典之

たけうち みちゆきさん 1944年京都市生まれ。2007年京都大学（フィールド科学教育研究センター教授）退職。京都大学名誉教授。大正大学客員教授、京都美術工芸大学非常勤講師。「日本に健全な森をつくり直す委員会」委員。

●荒廃する河川

宮城県南三陸町は志津川湾、伊里前湾に面する町で、北、西、南の三方は海抜高300㍍強の山地に区切られている。また、これらの山地森林で、森林の62%にあたる7768㌶がスギを主とする人工林である。これら人工林の多くは、手入れ不足で密林状態で、林床の植物はきわめて貧弱である。土壌層は流亡して貧弱で保水力がなく、人工林内の各沢は枯れ沢となっている。降水時には濁流となり、晴天時には水枯れを起こし、里域を流下する各河川の劣化、荒廃を引き起こしている。

●密度管理が鍵

大正大学は、童子山麓の山あいの小さな集落入谷地区に開設された「南三陸研修センター　南三陸まなびの里いりやど」を拠点に、「森・里・海の連環」を学ぶフィールド実習を9月12日に実施する。実習では大正大学の学生たちが、南三陸町で被害の大きかった戸倉中学の生徒たちや森林組合の若手職員とともに、「森の手入れ」を実体験し、「馬搬」の見学をすることになっている。

今、人工林の手入れで最も重要なのは密度管理の実行である。密度管理とは、一本一本の木に、生き生きと成長できる太陽光と空間を与えることにより、林を健全な状態に保ちつつ目標とする林型に誘導するために行うものであり、間伐はそのための作業である。

●「馬搬」に脚光

「森の手入れ」で念頭に置いてほしいのは、多様性の保全、生産性の確保、調和の確立である。多様性の保全とは、多様な森林生態系、多様な種、多様な遺伝子の保全であり、生産性の確保とは、森林生態系の有する多様な機能の発揮による多様な価値生産性の確保である。また、調和の確立とは、多様性の保全と生産性の確保との調和や隣接する河川生態系、湖岸域生態系、里域生態系などとの調和の確立である。

「馬搬」は、人と馬のエネルギーのみで林地から木材を搬出する作業法であり、石油など他のエネルギーを必要とする架線集材や機械集材とは異なって、環境に与える負荷が極めて少ない集材法である。また、林内作業機械に比べて林地のかく乱や踏圧による土壌の圧密などの影響の少ない「林地にやさしい集材法」である。日本ではほとんど見かけなくなったが、高性能林業機械による機械化集材が進んでいるヨーロッパ各地では、馬搬が林地保全の見地からあらためて脚光を浴びつつある。

◇

大正大（東京）と河北新報社の連携事業として、同大が宮城県南三陸町などで行う出前講座、フィールド学習の内容を担当の講師に月1回報告してもらいます。